

## 総 説

## 感情と欲望 I

## — 欲望思想の歴史 —

## Emotion and Desire I: History of Desire Theory

福 田 正 治

## はじめに

おいしいお菓子が欲しい、スポーツカーも欲しい、いい服も欲しい、家も金も名誉も恋人もすべて欲しい。この欲しいもののリストを思いつくままに上げていくと、この紙面いっぱいでは足りなくて、この論文一冊になるかもしれない。ある人は本能を思いつくままに1万個以上も数え上げた<sup>(1)</sup>。人の一生を考えると際限なくこのリストは増え続け、人は欲深いもので、最終的には物ではなく精神的な幸福や安らぎが欲しいと思ってしまう。さらには他人の心や人生までも欲しいと思うようになってくる。

古来、人の欲望は限りがないもの、ある時は、人生を狂わせるもの、別のときは人を奮い立たせるものとして捉えられてきた。この見方は、有史以来、神話の世界から続いてきている人間の営みで、現代においても変わりはない。

欲望や本能という言葉に非常に惹かれるものがある。それは、これらがあまりにも密接に日常生活に関係して、誰もが生活の中で経験し、それが行動に大きく影響することを実感でき、われわれの心を虜にしているからである。

欲望が考察の対象に上がってくるのは、遑と、ヒトが言語能力を獲得し、特にホモ・サピエンスの脳に至って、抽象的、論理的思考が可能になった時以来で<sup>(2)</sup>、非常に原始的で古いものである。しかし神話の世界では文字という記録が残っていないために、体系的に議論することができないでいた。たとえ文字が発明されたとしても、当初の文字は歴史の記録のためであり、法律や経済の規則の伝達手段として用いられており、人間の思考を体系的にまとめる道具としては成りえていなかった<sup>(3)</sup>。

哲学は「人は如何に生きるべきか」を問う学問である<sup>(4)</sup>。とするならば、生きる上で大きな影響をもつ欲望が思考の俎上に上がってくるのは当然の成り行きである。今日、その出発点はギリシア時代の哲学に求めることができ、それは「心」や「魂」の在り方の中で展開されてきた<sup>(5)</sup>。

もちろん世界文明の始まりはギリシアだけではない。不思議なことに、分離し隔離されていると考えられる世界のいくつかの場所で、同時に大きな思想の展開が起こった<sup>(6)</sup>。一つは中国であり、これが論語として残っている<sup>(7)</sup>。しかしこれは為政者である天子のあり方を論じるのが原点であり、一般人の生き方論ではない。したがって感情や欲望の捉え方は国を治める天子にあってどうあるべきかを主に議論しているものであって、感情や欲望を体系的に分析・発展させているわけではない。

また仏教という文化も同じころ、独立にインドで発生してきている<sup>(8)</sup>。これは宗教であるために学問としての厳密さは問われてはいない。

したがって欲望について体系的に議論しようとする、ギリシア哲学の中に戻っていかざるをえない。その中で、「欲望とは何か」という根源的な問いには、すべての人が興味あり、知りたいと思うが、これを知ろうとすると、現代の科学をしても非常に難しい。何千年の歴史の中で、数多くの天才がこの疑問を解こうとしてもがいてきた。現在においても、宗教家や哲学者を中心として繰り返し同じことが論じられている<sup>(9)</sup>。

しかし哲学は前にも述べたように「人間如何に生きるべきか」を問うているために欲望をどう取り扱い、生活の中でどう対処していくべきかを最終目標としている。とするならば、そこに欲望に対する価値観や社会通念、道徳が忍び寄り、善悪、正邪の判断が入り込み、欲望論を非常に複雑にしている。とても自然科学をベースにした現代の感情論や欲望論と同じ土俵で議論することはできない。欲望についてどう対処し、人生をよりよく生きていくかの問題は、現代、倫理学を中心に展開されており<sup>(10)</sup>、このような議論を展開する能力を筆者は持ち合わせていない。

ここでは欲望の理解についての前段階として、これらがどう捉えられているかを考え、今日の心理学と脳科学につながっていくかについて論じていきたい。

この一連の論文は大きく二つの問題意識から検討されたものである。一つは、現代科学の基礎を作った西洋哲学の歴史の中で欲望の取り扱いがどのように変化していったかを知ることである。当初、欲望は感情と同列に扱われ、これらを情念 (passion) という一つの大きな概念で捉えていた<sup>(11, 12)</sup>。つまり、議論は感情と欲望を同じ土俵の上で考え、今日のように感情と欲望を別個の機能として取り扱ってこなかった。西洋で2000年間、このような状態を持続してきた理由は何かを知ることである。

第二には、現代心理学および脳神経科学から議論されているところの因果論で、感情と欲望のそれぞれの原因は何か、それに伴う両者の関係を考察することである。最近の欲望に関する議論で、ある哲学者は「欲望の根源は快情動である」と述べている<sup>(13)</sup>。欲望の原因を考えていくと、感情の一種である快情動に達しうることができるとしている。一方、仏教においては、民衆の老病死の苦しみを救うにはどうすればよいのかを探求するなかで、「苦しみの原因は欲望である」とした<sup>(8)</sup>。

一方では、欲望の原因は感情であるといい、他方では限定的ではあるが感情の原因は欲望であ

るという。われわれの経験から、これら2つの結論はどちらも真理であるように思える。しかし両方が真であるとするならば、感情と欲望とは同じものになり、これは経験と異なる。一体どこで違って来たのであろうか。これは単なる言葉の遊びなのか、詭弁的な論理学の遊びであるのだろうか。ここにこの論文を書こうとした基本的なモチベーションがある。一体、感情と欲望の関係はどうなっているのかを考えるのがこの一連の論文の主旨である。

第一部では感情と欲望を同列に扱うようになった根拠を歴史の中に探る。そして第二部（別著）では感情と欲望が現代のように科学的に分離していった過程をたどり、さらに欲望が現代の心理学でどのように捉えられているかを議論する。

## 1. ギリシア哲学の中の欲望

現代科学から見れば、欲望は自然発生的で、進化に依存した動物にも存在する機能と考えるのが原点である。しかしギリシア時代には、現代のような科学的知識があったわけではない。そもそも科学的基盤がない中で、観察と経験、思索だけが人間を解釈する手段であった。そのような状況の中で、彼らが最初に関心をもった最大のターゲットは「魂」であった<sup>(5)</sup>。

「魂とは何か」、それから派生する「人間とは何か」が主要なテーマであり、当時の政治状況から「人間は如何に生きるべきか」、「人間はどうあるべきか」が哲学者に問われていた。その背後には政治体制の議論も含まれ、国のあるべき姿を描く国家論にも関係していた<sup>(14)</sup>。今日、感情や欲望は自然科学の対象となっているが、その当時、これらは「魂」の中の議論であり、自然科学でなかったことはまず念頭に置く必要がある。したがってギリシア哲学で扱われている欲望は、人間特有の部分だけを取り扱っていることに注意をする必要がある。ギリシア哲学の欲望を、今日の動物の機能までも含んだ欲望や本能と同じ土俵で比較することはできない。

### プラトン

そのことを含めた上で、今日の感情論や欲望論に大きな影響を与えたのは、ギリシア哲学のプラトン（BC427―BC347）から出発すると考えられる<sup>(5)</sup>。

プラトンが哲学に大きな影響を与えたことは良く知られたことである。その中で、理性に基づく、真、善、美などイデアの状態に近づくことが、真の人間の理想の姿であることを唱えた。それを考えるにあたって、当然、人間の振る舞いにおける感情や欲望について詳しく議論をしなければならなかった。

魂を考えたとき、その構成要素である感情は明らかに理知的能力と異なること、さらには飲食、性愛などの欲望とも異なることは十分に理解されていた。その上で、プラトンの「ピレボス」には欲望のことが議論されている<sup>(15)</sup>。

その魂は、知性的部分、気概的部分、欲望的部分から成り立っている。これらはロゴス（logos）に従うものと、従わないものにも分けられる。ここでロゴスとは、理性と解釈してよい。知性的部分はロゴスに従う部分である。感情は気概的部分に属する。この分類法には、自然に従

うものと、従わないものが存在することを仮定している。そしてギリシア哲学は、自然に従わない人間の魂の部分の考察を進めている学問とすることができる。

その中で欲望が、身体の問題ではなく魂（心）の問題であることを、渇きの例をあげて説明している。なぜこの問題を指摘するかといえば、今日の欲望の捉え方と、ギリシア時代の捉え方が基本的に異なるからである。現代の欲望は、基本的に生理学的欲求がベースであることが同意されているが、ギリシア時代ではそうは理解されていなく、魂・心の問題として出発していた。

渇きは、「飲み物の欲求か、それとも飲み物による充足か」のどちらかという問いをまず発する<sup>(15)</sup>。それに対する答として、プラトンは「充足の欲求である」と結論づける。欲求とは、「これと正反対のものの充足」を求めている。これは「魂の存在なしには不可能」なものであって、「充足を探り当てるのは魂」である。したがって、欲望は心理の問題となるのである。ここに渇きの問題は魂の問題にすり替えられている。一方、身体はどう関係するかといえば、「飢餓において身体は一種の空の状態」にあると分析する。空の状態は、何も存在しないということの意味するので、「身体領域には欲求は生じない」。そう考えると、渇きのような欲望は身体問題から離れることになり、哲学の問題になる。特にギリシア時代では飲食や性愛などの欲求の問題が重視され、その解釈が進んでいった。いつの時代もこれら二つは人間にとって大きな、かつ厄介な問題であった。

一方の感情は、非理知的部分に属し、上の分類では気概的部分に属することになっている。この気概的部分は勇気などの意志力を構成する重要な部分であり、欲望とは異なるものであることは十分理解されていた。しかしプラトンは、理知的ということを強調し、理想の生き方としてイデアを主張するあまり、他の二つの能力である感情と欲望をほぼ同列ものとしてみなし、非理知的能力としてグループ化してしまい、一つの概念として捉えられるようになった。それ以降、飲食や性愛は、怒りや恐れ、妬みなどの感情と働きにおいて同列に扱われるようになった。

また欲望は、「必要な欲望」、「不必要な欲望」、「不法な欲望」という分類も可能で、この見方を国家の発展形態と結びつけることも指摘した<sup>(14)</sup>。

これら理性、感情、欲望の特性として、「それぞれが固有の欲望を持ち」、それらは「それぞれがもつ異なった機能間での対立、葛藤」によって説明されると考える。「欲望的部分を制約して知性的部分の命令に従わせるのが気概的部分の役割である」とし、理性、感情、欲望の階層性の考えの芽生えが示される。これらの関係を維持するためには、知性的部分には知性、気概的部分には勇気、欲望の部分には節制という涵養が必要であるとしている。このように議論の一部では欲望、感情、理性が区別されながら、人間にとって機能的に感情や欲望の制御が難しいという視点から、これら欲望と感情は同一のカテゴリーの中で取り扱われていくことになっていく。われわれは、今日において欲望と感情の制御が経験上、時として非常に困難であるとして、これらを非理知的部分と考え、ギリシア時代以来の二分法的思考に陥ってしまっている。

この二分法の考え方がアリストテレス、ストア学派に受け継がれ、デカルトの情念論までに至る。

## アリストテレス

プラトンを受けてアリストテレスにおける欲望論は、「ニコスマス倫理学」の中で議論されている<sup>(16)</sup>。アリストテレス（BC384―BC322）はまず、人の魂は「ロゴスをもつ部分と、ロゴスをもたない部分」に分かれると考える。欲望は、後者のロゴスをもたない部分に属する。このロゴスを持たない部分をさらに、「ロゴスと関係ない飲食や生殖の植物機能の部分と、自分ではロゴスをもたないがロゴスの命令に従いうる部分」から成り立っているとした。これは、ある面ではプラトンの議論と共通の考え方であり、欲望の理解に関してあまり進展はなかった。

アリストテレスの魂は、「栄養摂取、感覚、思考、運動の始原である」と考えられており、これらの能力は階層関係にある。その中で栄養摂取が最基層に位置づけられ、他はその上位に属する。しかし議論は、もっぱら人間の固有の上位の機能だけに集中し、動物と共通する機能に関する議論は階層性の中で少なかった。

欲望の特性として、欲望は快を求め、苦を避けるという。快や苦が行動の基準となり、理性・ロゴスに逆らうことになる。このような特性が幸福な人生を乱すのであり、したがってロゴスに従うことが幸福の条件になってくる。その中でも、アリストテレスは、「節度ある人と抑制ある人とを区別し、二つのタイプの人が同じ状況で同じふるまいをしたとしても、抑制ある人が相反する欲求の葛藤において放埒な欲求に打ち勝つ人であるのにたいして、節度という徳を備えた人はむしろそのような欲求を持たない人である」と考える<sup>(17)</sup>。後で述べる仏教の教義との類似のところがある。

## ストア学派

ストア学派は、プラトンやアリストテレスの情念論を受けて、感情や欲望についての理論をまとめ、整理をした。その過程から今日、われわれが感情と欲望を一つにして捉えようとする理論的根拠が見て取れる<sup>(18, 19)</sup>。

ストア学派は、人間の行動を駆り立てる根本を衝動と捉え、衝動とは「何かに向かう、あるいは何かから離れる思考の運動である」と考えた。人間は行動する動物である。そこには行動に突き動かす何かがあり、自動的に行動が起こるわけではない。その一部がパトス pathos である。パトス (pathos) とは「過度の衝動、もしくはロゴスに基づいた尺度を超えた衝動、あるいは道を外れた、ロゴスに従わない衝動」である。理性が中心であるべき世界の中で、パトスは、「ロゴスに従わない分だけ自然に反した魂の動きである」と考える。そしてパトスの構成要素である欲望とは、「ロゴスに従わない欲求である」とした。いうなれば欲望は衝動であり、理性に従わないという点で抑制できないという考えが根底にある。感情もまた欲望と同様にロゴスに従わない行動であると考え、ここに欲望と感情が同じ発生源である衝動という特性でまとめられることになる。

その点で、パトスにはこれまでの議論から、現代でいうところの感情と欲望の両方が含まれていることになる。ストア学派では、情念 (passion) をはっきりと4種類の基本情念である、快

楽、恐れ、苦痛、欲望に整理した<sup>(11)</sup>。これはプラトンやアリストテレスではなかったことである。アリストテレスでは情念を単に怒り、恐れ、競争心、友愛と憎しみ、憐れみなど14例を提示し議論するだけで、基本情念という形で整理する考えはなかった。ストア学派では、パトスを「欲望、恐れ、苦痛、快楽」という4種類あると考え、「欲望と恐怖が先に来るものであって、前者は善と現われるものに、後者は悪と現われるものに関係している。快楽と苦痛とは、それらは後で生じ、快楽は我々が欲していたものに行きあたったり、恐れていたものを回避する際に、苦痛は我々が欲していたものを得そこなったり、恐れていたものに陥ったりする際に生じる」とした<sup>(18)</sup>。情念をこの4種類に集約されたとしたが、各感情、各欲望の整理の仕方を眺めると、例えば欲望には「切望、憎しみ、怒り、怨恨、立腹など」が含まれ、快楽には「魅了、有頂天、悪いある喜びなど」が含まれている<sup>(11)</sup>。現代から眺めると両者の混在が見て取れるが、その時代の感情や欲望の捉え方のちがいによるものであろう。ここで注意すべきは訳の問題で、例えば快楽を喜びと訳す場合があり、捉え方が大きく異なってくる。言葉を用いる難しさである。

ストア学派の見方は、「パトスは善悪の判断によって生じるのであって、善いものがその場にあると思って魂が動かされる場合には快楽であり、悪いものがその場にあると思って動かされる場合には苦痛である。また、予期される善いものによって動かされる場合には欲望が生じ、悪いものが予想される場合に生ずるパトスは恐怖である」とする。ストア学派に至り、パトスが善悪の判断によって生じるという善悪の概念の導入が起こってくる。何が善であり、何が悪であるか、はその時代の背景に影響され、暴飲暴食や邪淫が悪とされた。

ストア学派の人びとは、情念は衝動であり、抑制不可能な部分があることから、「あらゆるパトスを持たない方が良いと判断し、知者はパトスの陥ることがないゆえにパトスを持たない」と考えた。しかしここで指摘しておかなければならないのは、ストア学派の哲学において、他者への親愛や慈しみなどの「適切な感情」は排除されていなかった<sup>(19)</sup>。排除されていたのは、過度の暴走的な感情、たとえば嫉妬や同情は他人へのねたみと同様に、他人の災厄をただ傍観するだけの同情も、また悪しき感情とされた点は重要である。

ギリシア哲学では、基本的に感情や欲望は理知的部分より低次なものとして認識されている。われわれは、欲望や快楽という醜悪で凶暴なけだものを手名付け、少しでも穏やかに服従させなければならないと考える<sup>(15)</sup>。特にストア学派からこの見方が強調されていく。次で議論されるキリスト教の倫理では、ギリシア哲学のこのストア禁欲主義を取り入れ、ますます感情や欲望の情念は下位に押しやられていった。その理由は、人間には「善く生きる」ことが求められ、それには純粋な理性に基づく選択、判断が必要とされた。感情や欲望はそれを妨げるので、魂をできるだけ身体から切り離して、知性的部分でそれらを抑制し、正しい人間になることが求められた。

この感情や欲望の抑制が難しいことは、哲学の反面として、理性をどうとらえるかについて執拗に今日まで追求してきていることに表れている<sup>(5)</sup>。



## エピクロス

ギリシア時代の欲望を論じる場合、エピクロス（BC342–BC271頃）の快楽主義の考え方を避けるわけにはいかない<sup>(20, 21)</sup>。エピクロスは快楽主義といわれる考え方を提唱し、快楽こそが幸福であるとした。快楽という言葉には大きな誤解が付きまとうが、彼が考える欲望とは、「自然で必要な欲望」とその対極の「空しい欲望」、さらには中間の「自然だが必要ではない欲望」の三種類に分けられる。その中で、「必要な自然的欲望」は、（１）生存のために、（２）身体の健康（身体の障害からの開放）のために、（３）魂の不安解消（幸福）のために不可欠な欲望であるとし、これまでの人間一辺倒の分析から、動物にも含まれる要素を取り入れていった。

そしてさらにその議論は、「その対象が獲得容易な欲望は空しい欲望ではない。自然な欲望である」。「自然本性が要求する富」は、その要求に限りがあって容易に獲得できるが、さまざまな「空虚な思い込みが要求する富」は、その要求が際限なく進む。性欲を満たすのは、まあ難しいことではあるまい。その限りでは自然の欲望だろう。また充足されずとも身体が痛むわけではない」。しかしその場合でも「焦がれるような強い緊張が執拗に残るならば、そこにおける欲望は空虚な思い込みによって生じている。それが消散しないのは、欲望そのものの自然本性によるのではなく、その当人の空しい思いによる。ただ、一人の彼や彼女が性愛の対象となる場合がそれである」と分析する。

快楽をその時代時代の意味に捉え、時に性欲を、また自由な行動の中に快楽を見て、快楽を求めることが人間の本質であるとしてしまっているところがある。エピクロスが考える快楽とは、過度の要求や名誉心からの自由であり、そこからくる心の平静が真の快楽である。欲望の成就から来る快楽の追求は苦痛をもたらし、したがって名誉や富の欲求を捨てる生き方が必要であるとするのが、彼の快楽主義の趣旨である。後によく引用されるエピクロスの快楽主義は、現代の風潮を反映した曲解が大きい。

## 2. キリシト教の中の欲望

キリシト教は非常にストイックな宗教である。つまり、ギリシア哲学の禁欲主義的な思想を取り入れ、宗教体系が構築されている。その源流はすでにユダヤ教のモーゼの十戒の中に現われる、「汝姦淫するなかれ」、「汝盗むなかれ」などの戒めに見られる。これらの罪は人間の物欲や性欲の強さの裏返しともとれ、旧約聖書の中の女性を巡る神の争いがそれを物語っている。

キリシト教は、神への愛、神からの愛を中心的教義におくために、人間の欲望や感情は、これら神への愛を妨げる強い作用を持つものとして忌諱された。キリシト教が指摘する罪として、「色欲、貪食、怠惰（悲嘆）、強欲、憤怒、嫉妬、傲慢」の7つ大罪が象徴的にあげられ、罪の重さはこの順に重くなっていく。その中でも欲望の構成要素である色欲・肉欲が教会の大きな攻撃ターゲットとなっていた。性を巡る教会の攻撃は、ルネサンスの1500年代まで、さらには現代にいたるまで続き、現代から中世の対応を眺めると非常に滑稽なものに映る<sup>(22)</sup>。

神だけに集中して人間存在の全てを捧げるというキリシト教の前にはそうせざるを得なかった。

たとえば、なぜ色欲が大罪の一つになっていたかは、時に人間は神よりも恋人に心を奪われ、神の存在を忘れて恋に全生涯を捧げることが起こるからである。また若者にとっての性欲は抑えがたい力を持っており、悪の道に陥りやすいことは誰でも知っていたからである。この性を巡る行動の放置は、個人が自由を獲得し神の意志にそむくことになり、神をも恐れぬ冒涇となり、また教会の命令にも従わない要素を持つからである。逆から言えば、それだけこれら大罪に含まれる欲望が強い力を持ち、その制御は民衆も宗教者も厄介な問題として映っていたに違いない。時にこれらがフランスやスペインを中心とした魔女裁判の大量虐殺に進んだこともあった<sup>(23, 24)</sup>。しかしキリスト教は欲望を単に罪に問うだけでなく、告解を通してその罪を赦すという方策を持ち合わせていた。心から悔い改め、司教などに罪を告白し、宗教的赦しを得て、償いをするという中に欲望に対する現実的対処の智慧を見て取ることができる。

アウグスティヌスは「告白」の中で、情欲の強さに悩まされ、若い時の肉欲の経験からこれらの強さを素直に告白している<sup>(25)</sup>。彼の場合、神からの啓示を受け、そこから抜け出ることができた。彼は「神が人間を治め、精神が身体を治め、理性が情欲を治める」として神を大上段におき、欲望の制御に成功した。彼は肉欲を悪からさらに犯罪のレベルまで陥れようとした<sup>(26)</sup>。しかし一般の人々には非常に難しかったに違いない。15世紀の宗教改革は、ある面、悪しき欲望に陥った教会に対する抵抗であったのかもしれない<sup>(27)</sup>。

### 3. 近世の欲望

#### デカルト

情念に関して、中世までの1500年の長きにわたる考察の停滞から動き出したのは、ルネサンスのデカルト（1596-1650）からである。デカルトは方法序説で、これまでのスコラ哲学や学問を疑い、その根底から「われ思う。ゆえにわれあり」という考えを発見し、近代哲学の基礎を築いた<sup>(28)</sup>。

その内容をたどると、まず基本は、「いかなる意味でも、物体が考えるなどとは思わないがゆえに、われわれの内にある全ての種類の考えは、精神に属すると信ずるのが正しいのである」との心身二元論につながる考えを唱える<sup>(29)</sup>。物体は考えることができないというギリシア哲学が、ベースに流れている。身体は、「われわれのうちにある熱や運動のすべては、それらが思考に依存するのでない限り、身体にのみ所属すると信ずべきなのである」と、精神から区別するのである。その中で興味あるのは、神経系の取り扱いである。当時の解剖学から、脳から末梢の筋肉への神経線維の投射、および末梢の感覚器から脳への神経線維を介した投射があることは知られていた。その中から、「筋肉のこれらすべての運動、およびすべての感覚は、神経に依存しており、神経は、すべて脳から出るところの細い糸または細い管のようなものであって、脳と同様、動物精気と名付けられているきわめて微細な空気または風を入れている、ということも知られている」と記している。デカルトの前には実際脳が見えており、脳から出ている神経も見えていたが、しかし脳が何をしているか不明であった。彼の脳の理解は、1世紀頃の医学をまとめたガレノスの



見方以上にはなかったようである<sup>(30)</sup>。前にも述べたように、物体が考えるなどとは言えないところから、今日でいうところの脳の実質に心の座を設けることはできなかった。脳の中の隙間として、解剖学的に側脳室や第三脳室などが脳脊髄液がなくなった死体から見受けられることから、この空間に動物精気が満ちていると考えた。動物精気 (spirit) とは、「神経といわれる細い管の中を通る空気または風に相当する物質」であると考えられていた。しかしながら、「どのようにして動物精気と神経とが運動と感覚に関与するのか、また動物精気と神経とを活動させる物的原理は何であるかは、一般には知られていない」として詳細な議論を留保している。そこが心身二元論に彼が走らざるをえなかった理由である。しかし彼の素晴らしさは、論理的に精神と身体を繋ぐ松果体を見つけ、そこを連絡口としたことである。単なる二元論では当時の身体の働きを説明できなかったことによる。松果体は、脳の中心部にある1個の組織である。デカルトは視覚の考察から、両眼から入った像は左右の脳の両方に入力され、脳の中で2つの像が左右それぞれに映し出されると考える。しかし、われわれが見る像は一個であり、そうすると左右の像は脳のどこかで1個として認識される必要が出てくる。その部位を脳の中で探すと、多くは左右で二個あり不適當になる。松果体は脳の正中上にあり、一個である。デカルトはここに注目し、松果体を精神との窓口とした。当然のことながら、現代の松果体の見方にはそのような機能は一つもない。

デカルトの欲望論は、彼の「情念論」の中で展開されている<sup>(29)</sup>。情念は、「精神の知覚または感覚または感動であって、特に精神自身に関係づけられ、かつ精気のある運動によって引き起こされ維持され強められるところのもの」と定義されている。この情念は精神の座にあり、強く精神を動揺させるものである。そして、これらの基本情念の発生は、脳室内の動物精気のある運動から生じるものであり、それが松果体に合一している精神に情念を起こさせるとしている。デカルトはスコラ哲学のやり方を踏襲し、数ある情念を6つの基本情念に分類した。スコラ哲学では4種類の基本情念、「快楽、恐れ、苦痛、欲望」であったものが、デカルトでは、「驚き、喜び、恐れ、憎しみ、愛、欲望」の6種類になった。ここで快楽と喜びは訳の問題ではほぼ同じものと考えてよい。驚きと愛が増え、憎しみと恐れが入れ替わっている。この中での驚きは、「精神が受ける突然の不意打ち」である。また愛と憎しみは「精神の感動の一種であるが、愛は自ら適合していると思われる対象に自分の意思で結合させるものであり、憎しみは有害なものとして精神に現れる対象から離れていようとするもの」である。ここから愛は、肉欲の愛、恋人の愛ではないことを指摘しておく。どちらかといえばキリスト教における神への愛、神からの愛に相当するものである。男女間の愛も当然情念の中に含まれると考えられるが、「情念論」の中ではあえて触れず、別なところのエリザベートの書簡集の中で論じられている<sup>(31)</sup>。

ここで注目するのは、欲望の取り扱いで、欲望が基本情念の一つとして定義されていることである。これは前にも見たように、ギリシア哲学からの長い歴史を踏襲しているように見える。この点で、欲望は未だ独立の歩みを踏み出していないようである。

デカルトの欲望とは、「精気によって起こされた精神の動揺であって、精神が自分に適合していると想像する事がらを、未来に向かって意思するように促すものである」と考える。そして、「そこで欲望の対象は、いま存在しない善の現存のみならず、また現にある善の保存でもありうる。さらにまた、悪の不在、すでに持っている悪の不在のみならず、将来受け取ることがあるであろうと考えられるところの悪の不在でもありうるのである」。ストア主義と同様に欲望の中に善悪の概念を取り込み、そこに道德の議論の出発点があり、また欲望に対する対処法の出発点にもなりうる定義である。さらに、「われわれが、魂を用いて統御しなければならないのは、特に欲望であり、欲望の統御ということこそ、道德の主要な要素は存するのである。欲望は、それが真なる認識に従う場合は常に善である。欲望は、何らかの誤謬にもとづいている場合、必ず悪いのである」と言っている。その中でスコラ哲学との違いをいうために、善の追求に向かうところの情念のみを「欲望」とよび、悪の回避に向かう情念、すなわち「忌避」とよばれていることをも指摘している。そしてまた、「最も注目すべく最も強い欲望は、愛好と嫌悪から生じる欲望である」とし、感情から来る欲望の統御に大きな問題があることを指摘している。

## スピノザ

スピノザ (1632-1677) もまたデカルトの後、情念について「エティカ」の中で議論している<sup>(32)</sup>。彼の議論の仕方は、数学的であり公理から出発し定理を証明することで議論を進めている。その論理的な展開の中で、欲望とは「人間の本質そのものである」として、人間の基本的性質として捉えている。そして人間における欲望とは「自意識を伴った衝動」であるとし、そのことは、衝動とは人間の本質そのものであるといえる。つまり、「自己保存の欲望は人間精神の現実的本質であって、人間精神が個々の状況下で“食べたい”や“飲みたい”と考える根底には、“生きたい”という根源的な欲望が存在し、この欲望はその本性に属するのであって、これを意思の力で抑えることは端的に不可能なのである」といえる。このことは欲望を一括して低次のものとして捉えるのではなく、その一部である自己保存の欲望を肯定する方向に進んでいく。この点がスコラ哲学の流れとは異なるものであり、ここにギリシア哲学にない人間の本質の見方の第一歩がある。

スピノザは、ストア学派やデカルトと同様に基本情念という考え方を踏襲した。彼が唱える基本情念はデカルトよりも少なく、情念の基本を「喜び、悲しみ、欲望」の3要素と定義した。あまりにも単純であり、言い換えると、喜びは快と、悲しみは不快とみなすと、あらゆる感情はその成分を含んでいることになる。そしてあらゆる感情はこの3要素で説明される。たとえば、親切とは、「われわれが同情する人のために尽力しようとする欲望」である。怒りとは、「憎悪のために、われわれの憎むものに対して禍を及ぼすように駆り立てる欲望」である。肉欲とは、「異性と交合することに対する欲望であり、また愛」である。この定義は複合的である。今日肉欲は欲望の中に分類されるが、感情の愛の成分をも認めていることになる。

スピノザは、感情を「受動としての感情と能動としての感情に区別する」。「受動的感情とは精

神の他律的な作用であり、能動的とは自己意識に従った作用である。彼は感情が単なる他から影響されるという消極的な側面だけでなく、積極的な自己実現の側面も有することを認めるのである」<sup>(33)</sup>。欲望も同様な論理が適用され、受動としての欲望と能動としての欲望に区別することができる。

これらの特徴として、「善と悪の真なる認識から生じてくる欲望は、われわれを動揺させる感情から生じてくる他の多くの欲望によって圧倒され、あるいは抑えられうる」と考える。彼の欲望の考え方の中で、定理18に「喜びから生ずる欲望は、他の条件が同じであれば、悲しみから生ずる欲望よりも強力である」と記されている。欲望に対する楽観的な側面が出ていて、これもスコラ哲学からの一歩前進であると考えられる。

デカルトもスピノザも人間の魂だけの議論であり、動物の欲望の考え方はない。したがってこの欲望は「人間が自分自身を保持するのに役立つことをなすように決定されているかぎり」においてであった。欲望という概念は、したがって「人間の努力、潜在衝動、衝動、さらに意思などの全てを意味する」ことになる。つまり「衝動と欲望との間には、もっぱら欲望が自分の衝動を意識している人に関してのみ妥当する点を除けば、両者を区別するものはなにもない」ことになる。「欲望とはみずからの衝動を意識している衝動である」。自己意識の存在を展開したところに、キリスト教から離れて市民社会の成長の影響を見ることができる。

## ヒューム

ヒューム（1711-1776）はイギリスの経験論を代表する哲学者である。ルネサンスから出発した情念論の18世紀における論点が彼から見てとれる。ヒュームは「人性論」の中で情念を取り扱い、これまで理性の従属的な取り扱いから逆転し、情念の独立の下地を作ったものとして位置づけられる<sup>(34)</sup>。

ヒュームは、まず情念を二つの部分の、直接的と間接的部分に区分する。直接的な情念は、「善あるいは悪、快あるいは苦からじかに起るもの」である。それには欲望、嫌悪、悲しみ、喜び、望み、失望、安心が含まれる。そして間接的な情念は、「他の諸性質が相伴って生じるようなもの」で、誇り、卑下、野望、高慢、愛、憎しみ、怨み、憐れみ、悪意、寛大、およびこれらに伴う諸情念が含まれる。ヒュームが情念について最も力を入れて説明するのは、間接的な情念で、その中でも誇りと卑下、愛と憎しみを取り上げ、他者の存在下での情念の複雑さを論じている。哲学者によって強調する感情や欲望の種類が異なってくるのは興味あることである。

その中で、彼が懐疑的に指摘するのは「第一に、理性だけでは決してどんな意志の働きにとっても動機となり得ないこと、第二に、意思を導く際に理性が情念と対立することは決してあり得ないこと」である。さらに「理性だけではいかなる行為も生みだしえず、意思作用は生じえないのだから、これから推理して、同じ理性という機能が意思作用を妨げたり、情念あるいは感動と優先を争ったりもできないはずである」。「理性は情念の奴隷であり、またそれだけのものである

べきであって、理性は情念に仕え、従う以外何らかの役目をあえて望むことは決してできないのである」とし、ここにギリシア時代から面々と続いてきた理性の優位性に疑問を呈するのである。

一方、直接的な情念について、「善や悪、言いかえると、快や苦のほか、自然な衝動もしくは本能からしばしば直接的な情念が起る」。そして「この種の情念として、たとえば敵をこらめたい欲望、友人の幸福を願う欲望、飢え、性欲、その他いくつかの身体的欲望がある。正しく言えば、これらの情念は、善や悪を産むのであって、他の感情のように善や悪からおこるのではない」という。これは、今日でいうところの本能に近いものを述べていることになる。しかしヒュームはその時代の知見から、「この衝動とか本能はまったく説明しがたいものである」と言わざるをえなかった。

欲望自体については、あまり議論されていないが、理性と情念の位置づけの逆転を指摘したことは、18世紀から19世紀にかけての情念から欲望と感情が独立していくきっかけを作る上で重要なステップであった。また欲望が自然状態の快や不快で因果論的に説明されていくはしりでもあった。

#### 4. 仏教の中の欲望

日本における精神形成を論じる場合、仏教を抜きにして論じることはできない。特に欲望について考える場合は、仏教は大きな影響を日本思想に与えた<sup>(8, 35)</sup>。

仏教が伝来する以前の日本は神道であり、自然崇拝が基本にあった。自然の神は、八百万の神といわれるほどわれわれの周りに多数存在し、欲望を開放するといったことは神の怒りにふれ祟りになることから忌諱されてきた。古代、世界を通じて道徳といわれるものはあまり理論的に確立せず、自然の中でのこのようなアニミズムの精神があった。

人間の欲望を現われるがままに放置しておく世界は乱れ、戦争が起り、多くの人々が不幸になることは歴史が証明している。そこは混沌が支配し、領土や国の統治が難しくなるということから、人間は「こうあるべきだ」として、世界のいくつかの文明の中で宗教や思想が同時に発生してきた。

仏教はその中の一つであり、インドのガンジス河のほとりで、シッダッタ (BC463頃-BC383頃) によって開祖された。その基本は四諦と知られ、西洋にはない基準、すなわち人間に対する深い洞察から出発した<sup>(8)</sup>。第一が苦諦で、「人生は苦しみである」と釈迦は看破する。そしてその原因は第二の集 (じゅう) 諦で「苦しみの原因は煩悩である」という。その苦しみを無くするには第三の滅諦である「煩悩を無くする」ことによって達せられる。それを実現するためには、第四の道諦である「八正道を守る」ことが必要であると考えた。釈迦が厳しい苦行をした後、悟りに達した最初の真理であるといわれている。

ここで問題になるのは煩悩の捉え方であり分析である。煩悩とは、「心身を乱し悩ませる精神作用全般」をとらえて使われており、西洋思想からいえば、理性、感情、欲望を含んだ精神状態を表す。これは後の唯識学で詳しく議論されており<sup>(36, 37)</sup>、それに従えば、煩悩は六つの基本煩

悩と百八つの随煩惱に分かれる。

基本煩惱として、貪（とん）、瞋（しん）、癡（ち）、慢、疑、悪見の六種類があげられる。貪は生存に対するむさぼりを表し、執着、愛、喜、樂を意味している。瞋は怒りを現し、怒、悪、哀に相当している。癡は真理に対する無知を意味し、迷いなどを含む。慢は己をたのみ他人に対しておごり高ぶること、疑は真理に対して疑うこと、悪見は真理に対して誤った見解を主張して執着することを表している。これら六種類の煩惱を基本煩惱として百八つの随煩惱が派生してくる。この中で、癡がもっとも根本的なもので、他はこれから派生してくるとされている。すなわち、癡は無明のことであり、真理を自覚しないがゆえに貪と瞋が生じ、これら合わせて三毒という。ここで真理という言葉が使われているが、「何が真理なのか」ということには、感情や欲望だけでは判断できず、ここに理性や思考が含まれている。この点はギリシア哲学のロゴスを基準においた考え方と似ている。真理に対して知らないがゆえに、悪しき感情が生じ、苦しみが発生するとみなされる。煩惱とはその点で理性、感情、欲望を含んだ統合的概念であるといえる。

仏教の基本は、その人間の苦しみを取り除く所にその本質がある。苦しみとは四苦八苦の、生、老、病、死、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦である。その中の五蘊とは、人間的存在を構成する5要素、すなわち肉体および外界のあらゆる物質的要素である色、外界から受け取る印象や感覚などの受、事物の姿を心像としてまとめる知覚や表像などの想、それ以外のあらゆる心理的作用である行、そして個々の心理作用を総合する精神活動である識をさす。苦しみの原因は欲望とも言い換えることもあり、欲望には感覚的欲望である欲愛、生存への欲望である有愛、生存への断絶への欲望である無有愛がある<sup>(8)</sup>。このように、煩惱は欲望と密接に関係し、煩惱の裏に欲望が存在し、仏教の真理は「欲望をのこりなく滅ぼし、断念し、放棄し、解脱し、執着しないことである」と説く。四苦八苦の中味を眺めると、そこに人間の悩める欲の深さを思わざるをえない。極端には、永遠の命を望み、永遠の愛を求め、あらゆる富を得ようとする人間の業の深さを仏教の洞察の中に見ることができる。さらには生まれてきた人間の存在自体が苦しみの原因であるようにも見てとれる。

仏教の煩惱は、今日の心理学から考えると、分析的であると同時に包括的でもある。われわれの心の働きの中で、苦しみを生みだす心の働きを、知性、意思、感情、欲望などの分析的な成分を見直して煩惱というカテゴリーの中に包含してしまったのが仏教である。したがって、煩惱の中には感情や知性、欲望成分が混在し、西洋心理学と比較することを困難にしている。しかし、前にも述べたように、仏教の出発点は人間の苦しみの除去であって、これはギリシア哲学とも同じである。仏教ではその欲望を修行によって捨てるという解答を見出し、西洋ではそれら欲望を理性によって抑圧するという解答を見つけ、今日の精神の源流を作っている。日本では、前者の欲を捨てるという考え方に多くの人々が魅かれていっている。

唯識学とは、仏教における心理学といってよく、7世紀頃、この学問が確立され、その中で顕著な発見は魂の階層性である<sup>(36)</sup>。五感に相当する五層の感覚識に、第六層の意識を加え、さらに第七層にアラヤ識、第八層にマナ識を加えて、全体の心としたことである。これらを海に例え



ると、第六層までは波が漂う海の表面を示し、現実の生活の中で動かされる心の動揺を示している。第七層はその下で、光は届くが波の動きの影響を受けない場所で、第八層はさらに深く光も浪間の嵐の影響も受けない深海の状態に相当している。第七層、第八層は今日でいうところの無意識のレベルで、われわれの心の根底には、欲望も感情もない無の状態が存在することを分析した。西洋哲学は人間の心の表層を一生懸命に分析していたのに仏教はさらにその深層に迫っていったことは特質すべきことである。精神分析学派やユング学派がこのことに注目したのは当然の成り行きであった<sup>(38)</sup>。われわれが持っている心とは、そのような八層の精神構造ではあるが、凡人はアラヤ識やマナ識のレベルに心の状態を持っていくのは非常に難しい。表面に起る荒波にもまれ漂っているのが人間ではないかと仏教は示唆している。

## 5. まとめ

先人が欲望についてどのように捉えていたのかを、心理学との対応を考えて、ギリシア時代から近代の18世紀ごろまでを概観した。欲望論の多くは哲学の領域で議論されているテーマで、「人間如何に生きるべきか」を基盤に進められてきたために、当然のことながら、欲望の捉え方と同時に、その対処の仕方、その中の自己コントロール、人生の中で欲望とどのように付き合っていくかが議論の主題にされてきた。事実、対処法では、プラトンからの流れをくむストア主義と、エピクロスの流れをくむ快楽主義の捉え方が西洋思想の底流の流れ、宗教や哲学において浮き沈みを繰り返していた<sup>(39)</sup>。その中にはアリストテレスの中庸的な態度や、ストア派の禁欲的な考え方、さらにはキリスト教のグノーシスなどがとり上げられる。しかし、ここでは欲望や感情に対する対処法は、自体の価値観に影響されるため、この論文の対象とはしなかった。何が善悪であり、何が正邪であるかは時代とともに変わっていくからである。ギリシア時代の奴隷制は議論の中では出てこないし、階級制度における格差も出てこない。キリスト教でいえば、異邦人の取り扱いも現代とは異なっている。それを現代と同じである欲望や感情という言葉で語るには難しい。

この小論の第一の問題は、感情と欲望がどうして同一の土俵で、同列として取り上げられているかという問題であった。ギリシア時代から始まった情念論は、主たる関心の的が人間に制限されていた。その当時、動物に魂があるという発想はなく、魂や心は神から与えられた人間だけの問題であった。もちろん動物にも、人間と同じように食物を食べ、水を飲み、性行動することは観察されていたが、その動物の行動は切り捨てられていた。

感情と欲望は、人間の行動の原動力として衝動から、同じ働きとみなされていた。もちろん人間において感情と欲望は異なるものと認識されつつも、プラトンから出発した情念論は、約2000年の間、感情と欲望を同じく理性の従僕という取り扱いにしていた。それが科学として分離していくのは、ルネサンス以降であり、個人主義の勃興、動物の行動の詳細な解析を含む進化論や心理学、生理学の確立に待たなければならなかった。次の世紀では、もはや感情と欲望を情念というカテゴリーで議論することができなくなってきた。これについては別の論文で議論される予定



である。

## 文献

1. ゲーレン, A. 人間. 世界思想社、2008.
2. Mithen, S. The Prehistory of the Mind. London: Thames and Hudson, 1996 (松浦俊輔・牧野美佐緒訳、心の先史時代. 青土社、1998).
3. 世界の歴史① 人類の起源と古代オリエント. 大貫良夫他、中央公論社、1998.
4. 木田 元 反哲学入門. 新潮社、2007.
5. 哲学の歴史 内山勝利、小林道夫、中川純男、松永澄夫編集、中央公論新社、2007.
6. 青柳正規 人類文明の黎明と暮れ方. 興亡の世界史00、講談社、2009.
7. 孔子 論語. 貝塚茂樹訳、世界の名著3、中央公論社、1966.
8. 渡辺照宏 仏教. 岩波書店、1974
9. ドゥルーズ, J., ガクリ, F. アンチ・オイディプス. 河出書房新社、1986.
10. Moore, G.E. Principia Ethica. Cambridge University Press, 2000 (泉谷周三郎、寺中平治、星野勉訳、倫理学原理. 三和書籍、2010).
11. 廣川洋一 古代感情論. 岩波書店、2000.
12. 加茂英臣 欲望論. 晃洋書房、2011.
13. Irvine, W. B. On Desire, Why we want what we want. Oxford University Press, 2006 (竹内和世訳、欲望について、白揚社、2007)
14. プラトン 国家論. 田中美知太郎、藤沢令夫、山野耕治訳、世界の名著7、中央公論社、1969.
15. プラトン ピレボス 田中美知太郎訳、プラトン全集4、岩波書店、1975.
16. アリストテレス ニコマコス倫理学. 高田三郎訳、岩波書店、1971.
17. 中畑正志 アリストテレス. 哲学の歴史2. 内山勝利編、中央公論新社、2008.
18. クリュシッポス 初期ストア派断片集4. 西洋古典叢書、2005.
19. 神埼 繁 ゼノンと初期ストア学派. 哲学の歴史1. 内山勝利編、中央公論新社、2007.
20. 小池澄夫 エピクロスと初期エピクロス学派. 哲学の歴史1. 内山勝利編、中央公論新社、2007.
21. 木原武一 快楽の哲学. 日本放送出版協会、2010.
22. Foucault, M. La Volonte de Savoir. Editond Gallimard, 1976 (渡辺守章訳、性の歴史I. 新潮社、1986).
23. Cohn, N. Europe's Inner Demons. Paladin Books, 1976 (山本通訳、魔女狩りの社会史. 岩波書店、1983).
24. Delumeau, J. La Peur en Occident (XIVe-XVIIIe siecles) (永見文雄・西沢文昭訳、恐怖心の歴史. 新評論、1997).
25. アウグスティヌス 告白. 山田晶訳、世界の名著14、中央公論社、1968.
26. アウグスティヌス 神の国. アウグスティヌス著作集12、教文館、1982.
27. コルバン, A. キリスト教の歴史. 浜名優実監訳、藤原書店、2010.
28. デカルト, R. 方法序説. 野田又夫訳、世界の名著22、中央公論社、1967.
29. デカルト, R. 情念論 野田又夫訳、世界の名著22、中央公論社、1967.
30. 二宮陸雄 ガレノス: 靈魂の解剖学. 平河出版社、1993.
31. デカルト, R. 書簡集. 野田又夫訳、世界の名著22、中央公論社、1967.
32. スピノザ, B. エチカ. 工藤・斉藤訳、世界の名著25、中央公論社、1969.
33. 松田克進 スピノザ. 哲学の歴史5. 小林道夫編、中央公論新社、2007.

34. ヒューム, D. 人性論. 土岐邦夫訳、世界の名著27. 中央公論社、1968.
35. ひろ ちさや 仏教とキリスト教. 新潮社、1986.
36. 勝呂信静 大乘仏教における心理学. 三枝充恵編、講座仏教思想4、理想社、1975.
37. 岡野守也 唯識の心理学. 青土社、1999.
38. Stevens, A. On Jung. Routledge, 1990 (佐山堇子訳、ユング. 新曜社、1993).
39. Blackburn, S. Lust: The Seven Deadly Sins. Oxford University Press, 2004 (屋代通子訳、哲人たちはいかにして色欲と闘ってきたのか. 築地書館、2011).